

ならない。豆類やスイートコーンも発芽しない」とこぼす。ここ50年でも記憶にないという乾燥状態は、冬の少雪で畑が雪解け水を蓄えられなかったことも影響しているとみる。

作物の生育にとって、初期に当たる5月の気象は重要。坂東さんは「雪不足、雨不足、高温でトリプルパンチだ」と話す。

帯広測候所によると24日に、にわか雨が降る可能性はあるが、まとまった雨は当面、期待できないとしている。農家の間では台風被害があった2016年のときと状況が似ているとの声も出ている。

ある農家は「16年や、夏以降に雨が続いた昨年のように、後で一気に降っても困る。適度に降ってほしい」と複雑な心境をのぞかせている。

十勝総合振興局農務課は「ほ場の状態を小まめに確認して、かんがい施設があれば活用してほしい」としている。

## 豪雨災害3年

2019年8月30日

### 「やるしかない」 畑の表土流失 続く土づくり

十勝管内などに大きな被害を与えた2016年の台風10号から30日で丸3年。災害復旧は終盤となり、河川の氾濫で流失した農地は3度目の収穫期を迎えた。被災した畑に作物が育ち、農家を一安心させているが、本来の地力は戻っていない。回復は道半ば、土づくりの模索が続いている。

#### ◆1ヘクタールに堆肥30トン

「2作目でこれだけならありがたい水準」

芽室町芽室南2線の農業瀬川幹生さん(39)は、今年の作柄について、こう感触を語った。3年前、近くの芽室川から流れ込んだ土砂で「河原」のようだった場所は、青々とした小豆畑が広がっていた。

瀬川さんの畑は川沿いの8.3ヘクタールが被害に遭い、収穫直前のジャガイモが流された。条件の良い畑だっただけに大きなショックだった。再開に向けて表土を入れる作業が終了したのが翌17年7月。その年の収穫は諦めざるを得なかった。

運び込まれた土に養分を与えるため2年間、1ヘクタール当たり30~50トンの堆肥を投入。不安の中で収穫を迎えた昨年の小麦はまずまずの出来だったが、場所によって畑が軟らかく、トラクターのハンドルを取られることも。作物は育っても土の違いは実感した。



小豆の出来を見る瀬川さん。  
地力回復へ土づくりの模索が続く

#### ◆小麦、平年の半分

札内川と戸蔭別川の合流地点の帯広市中島町。堤防が決壊して約30ヘクタールで農作物や土が流された。その一角に畑を持つ農業西村信男さん(61)は「思ったより土は悪くない。作物はできると分かった」とし、均一に育ったトウモロコシ畑を見つめた。

ただ、近くで今年収穫した小麦の出来は芳しくなかった。地域は平年作以上だったが西村さんの小麦は平年の半分程度。トウモロコシ畑と土の性質が違い排水に苦労している。「皆一生懸命にやってくれている。土の好き嫌いを言うことはできない」と西村さんは静かに語る。

#### ◆掘削土、性質ばらつき

3年前の連続台風で被災した管内の農地のうち、特に被害の大きい約290ヘクタールの復旧には、国・道などが連携して河川の掘削土を使った。通常は山を削って土を確保するが、早期復旧を優先し、十勝川の治水工事で出た土を運びこんだ経緯がある。

土は異なる場所から運び込まれるため、元の土とは性質や養分が異なり、農家は土づくりに苦心している。粘土質の土が入った畑では特に排水対策に神経を使う。道や試験研究機関、JAなどは被災農家の作物や土壌の変化などを継続的に調査し、収量回復に向けてサポートする。

瀬川さんは水はけの良い土の客土を検討。来年以降、ジャガイモなど地力が作柄に表れる根菜を植えるため、土づくりの真価が問われることになる。

地力が回復するまで長い年月を要することは承知しながらも、「(土づくりが)正しい方向に向かっているのかどうか…」と不安がよぎる。「やるしかない。1年でも早く地力を戻したい」と瀬川さんは、自分に言い聞かせている。